

法相応の教法は法華本門であることが説かれている。したがって特に公家奏聞の際には、日蓮が説いた末法相応の法華経への帰依の必要性をより明確に示すため、本書を副進したと考えられる。そして先師申状の副進は、日興門流による諫暁の継続性を示すためだと推測される。

前述の通り、日興滅後の日興門流における諫暁活動は、特に日興入滅直後十数年間に集中して見られる。その間に諫暁を行った門下は大石寺三世日目、四世日道、五世日行、北山本門寺二世日妙、西山本門寺三世日代・日善・日助(三師連名で申状を提出)、京都要法寺四世日尊、保田妙本寺四世日郷が確認される。この内日目は日興入滅の年に、日行は日道入滅の翌年に、日妙と日郷は日興・日目の年回忌にあたる年に諫暁を行っており、これらの諫暁は先師への報恩の意味合いを含めて行われたものと考えられる。またこれらの諫暁の成果については不明な点が多いが、康永四年(一三四五)三月の日郷申状には、日蓮・日興・日目の諫暁は公家武家共に受容されなかった旨が記されている。しかし先師の諫暁が受容されなかったことが、日興門流諸師にとつては、かえってさらなる国家諫暁への発奮材料となったのではないだろうか。

このように日興滅後の日興門流における国家諫暁は、立正安国の理想実現のために日蓮と日興の遺志を継承し、先師が為し得なかった王城教化を自ら果たそうという使命感のもとに行われた。再三にわたる申状提出の史実は、国家諫暁が日興門流の教化活動における一つの大きな目標であったことを如実に物語っている。

編年体御書目録『祖書目次』の書誌学的研究

木村 中一

日蓮教学・教団史上で、その教義と信仰は、日蓮聖人(以下、聖人と記す)の記された「遺文」を基として成り立っていることは言うまでもない。遺文継承は真筆、写本、刊本とその形態を時代の流れと共に変えていく。その流れの中で、大きな役割を果たしたのが集成本の存在であり、第一次集成本『録内御書』、第二次集成本『録外御書』は、今もなおその詳細について多くの論点を有している。そして先にも述べたように時代の流れと共に、近世においてこの第一次集成本『録内御書』は写本にての伝来から刊本による伝来と姿を変え世に流布して行く。このような集成本の遺文配置は、教義上重要である遺文から優先に配置されているように見受けられる。しかし近世中期よりそれとは異なる遺文配置、つまり聖人の生涯に沿って順番に遺文配置がなされた「編年体御書目録」が集成され、教学・教団史上にて新たな展開を見るのである。この「編年体御書目録」は先師先学が総合的に各目録を考察しているが、個別の「編年体御書目録」についての成立の意義などについて検討はなされていない。そこで本発表は「編年体御書目録」の中でも初めて刊本化され世に流布し、後の教学史に大きな影響を与えた『新撰祖書目次』(『祖書目次』)について管見ながら検討し、三種の異本における遺文配置の差異を確認することにより、その各本の成立について考察した。

今回比較対照としたのは①安永八年に刊行された収録遺文数三百五十五編の『祖書目次』(以下、『安永本』と略記す)、②弘化三年(一八四六)に改刻された収録遺文数三百五十八編の弘化改訂本『祖書目次』(以下、『弘化改訂本』と略記す)、さらに新たに確認することができた③常忍寺寄贈日蓮教学研究所架蔵写本『祖書年序新目録』(収録遺文数三百五十一編。以下、『常忍寺本』と略記す)の三本の異本である。

これら三種の『祖書目次』の遺文配置を比較検討した結果、
 A 『安永本』・『弘化改訂本』同一記載、『常忍寺本』記載なし
 B 『弘化改訂本』・『常忍寺本』同一記載、『安永本』記載なし
 C 『安永本』・『常忍寺本』同一記載、『弘化改訂本』記載なし
 D 『安永本』のみ記載
 E 『弘化改訂本』のみ記載
 F 『常忍寺本』のみ記載

以上の六つの事が指摘できた。これら結果より、

(一) 『常忍寺本』は『安永本』を底本とした可能性が高い。
 (B・Cによる)

(二) 『常忍寺本』は『弘化改訂本』成立以前に書写されたか、あるいは弘化改訂本に依っていない。(B・Eによる)

(三) 『常忍寺本』は安永本と弘化改訂本の間で成立した可能性が高い。

と、結果として三本の異本の成立について右記の三点が挙げられる。

鈴木一成氏がこの『祖書目次』について指摘している「この三部は出版後間もなく火災の為板木を焼失、絶版となっていた」

の一文、つまり安永本はその出版部数が少なく希少であった、また当時刊本も書写されることが多くあったことより『常忍寺本』の筆者は『安永本』をただ書写するだけでなく自らの見解を踏まえ、『祖書目次』(『安永本』)の異本を作製し、それを受容していたことが指摘できるのである。それはまた日英による弘化年間の改訂を受けてはいないながらも同一部分も見受けられ、このことより『常忍寺本』の筆者はかなりの学僧(もしくは在家知識人)であったと推察できるのである。

近代日蓮仏教と生命言説

——日蓮系新宗教の救済観の比較——

大西 克明

本報告は、近代における日蓮仏教と生命言説との関連について、日蓮系新宗教の「生命」についての言説比較から、その性質を明らかにしようとするものである。

我が国の新宗教研究において、仏教系新宗教を含む新宗教に通底する教えの構造として「生命主義的救済観」が指摘されてきた。それは、豊饒な産出力に満ちた宇宙と生命という世界観であり、根源的生命との調和の回復が目指されるような救済観である。

だが、本報告では、生命主義的救済観の検討事例の対象とならなかった本門仏立講と、検討された創価学会との比較を通して再検討し、日蓮仏教と生命言説との関連について明らかにしたい。